東京外国語大学 博士学位論文 Doctoral thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

第2章

現代語における二形式の機能分担の地域的バリエーション

2.1. 第2章の目的

第1章では、現代半島スペイン語における二形式の意味的差異に関するいくつかの論考を概観した。各論考で規定方法は異なっているとはいえ、二形式間に見い出せる本質的な意味的差異は、「発話時との関連付けの有無」として一般化することができよう。現代のイベリア半島スペイン語については、単純過去形は発話時とは断絶した絶対的・完結的な過去の事象を表し、現在完了形は発話時と何らかの関連をもつ、発話時以前の事象を表すという区別が、一般的な見解であると言えそうである。

しかしながらこうした区別は、全てのスペイン語圏に共通した二形式の使用状況を生み出しているわけではない。例えばラテンアメリカの多くの地域のスペイン語では、特に口語のレベルにおいて単純過去形の頻度が現在完了形に比べ非常に高く、二形式の使い分けも異なっていることが指摘されている。

本章では、現代語における二形式の使用状況の地理的変異に注目する。まず、現代スペイン語圏全体における二形式の機能分担の地域的バリエーションを先行研究に基づき概観する。続いて、二形式の使い分けを比較対照する目的から、二大バリエーションを代表する二地域、すなわち現代のイベリア半島[1]とメキシコのスペイン語をとりあげ、使用状況を観察する。まず先行の個別研究を概観した後、両地域のスペイン語における用例を分析していく。ここでは特に、各形式がとる用法とその頻度に注目し、二形式の区別に関わる要因を考察する。今回は二地域間の相違点を重点的に観察する目的から、発話時と関連をもつ過去の事象への言及が比較的多く出現することが予想される口語的な戯曲作品を対象とし、特に「発話時に対する直前性」を表す場合の両形式の頻度に注目していく。同時に、現在完了形のその他の用法の出現頻度、総数に占める割合を二地域で比較する。最後に、いくつかの時間表現との共起状況もとりあげていく。

---

[1] 本章では現代イベリア半島で話される諸言語のうち、いわゆるカスティーリャ語における一般的な使用を半島スペイン語の代表として扱っていく。次節でとりあげるKany(1970)などの指摘にもあるように、半島内部でもガリシア、アストゥリアス、レオンの一部では単純過去形の特徴的な使用が見られるとされる。また、アンダルシアの一部についてもレオンなどと共通する現象の存在がZamora Vicente (1967[2]: 330, 208)によって指摘されている。